



春樹奇俠客傳

第三集

全

貳

3157
12



3157
12

常五

開卷驚奇俠客傳第三集卷之二

東都

曲亭主人編次

金鑑

全長

第二回

金閣の女俠 雙言を殪せ
葛城の仙嬢 敬言を昇る

應永十五年戊子の夏五月六日の晡時小姑麻呂姫の仙傳至妙の劍術を以て
北山ある金閣を投て飛行せし折九六媛の丹方の天を目送り獨點頭て身を以て
よりのけん親香爐を推して葛城山の絶頂へ飛鳥の如く立ち登りて品石の坐を
占めうち仰ぎて姑且祈念を凝しけりその意念姑麻呂姫の宿望那首の虚に世を
累心たる死敵を敷き治て孝義心烈を果さざると天神地祇の禱を乞ふに既に
九六媛の點燭時候小峯上と下で徐小姑麻呂姫と等程は這夜初更に比及小
外面小颯と音にて窓より内小合の比のけり是則姑麻呂姫のしるもくも猜せし

大正十一年二月

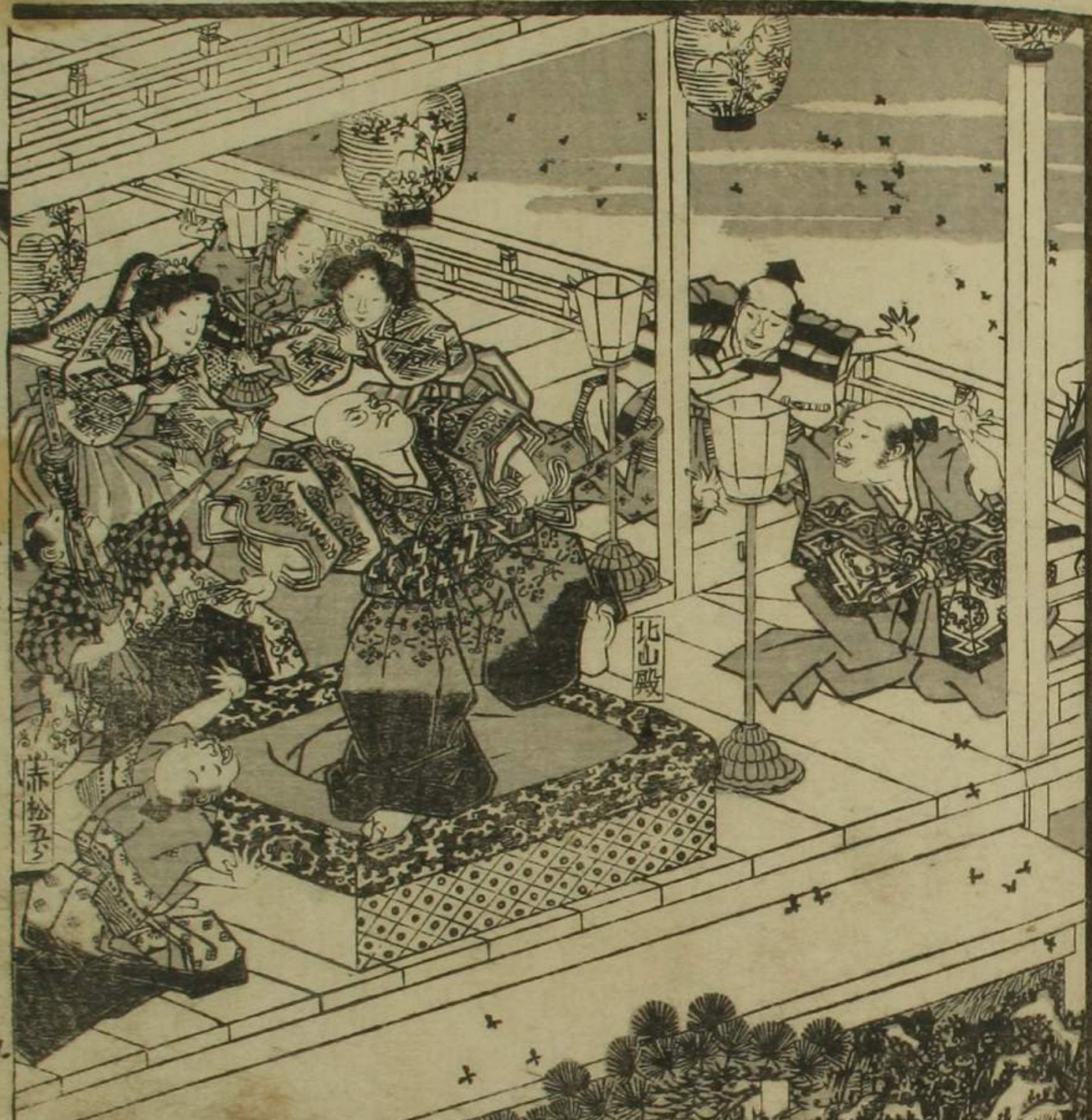
曲亭主人

下水銀河の泉三層の浮屠三回半の佛壇の天子の御座御遊の回玉と樓光
錦の席と七宝の延満と八珍の美饌小冊を列ねる近臣の勤所遠侍男房女
房の局小至の枚奉の違もあらず義満既相國と辞となり將軍と嫡子義持
譲りてあり祝髪入道と法名道義と稱へ這山莊の退隱の春秋十回不餘とも
然とそ定の隱道なるが國家の政事大小とるがさし沙汰さるけり然るに管領四
職七頭の評定衆御内へ外様も日毎山莊に出仕く旨と伺ふとて
修の程は入道相國の四月廿日より霜露の病着ありとて尚某の老殿
各々醫藥を演衆議の良某とあてて朝夕の脈脈夜毎の宿直誰う怠るもの
あらん室町殿の使使の棋家播紳の訪問日之櫛の齒と挽くごとく御内外様の
大小名も常より煩く伺候して前宛市の如く諸社諸山の加持祈禱を疎畧する
けり驗も五月に至りて病着の大抵の瘥りぬるるも浴湯とまぬる端午の節

れに受ぬるを無事の出仕と林のむをそて六日身邊親に青侍の仕へる今茲の暑
熱のさるは五月と久も雨稀なれば只牛も月不喘ふるべし免道より堂を令守
せど他地の畔は放散ら黄昏時候より齋の姑且垂簾てりしは御影散
るべしと京薦ののありくその是定はるべしと二三日已前よりさくとの準備
あり有司奉りて免道も堂とくともおぼく擇採らして萌葱は紗大なる簾草は
植水と沃たの日光山の御所まわらせれば法水院と齋とをその時刻と定めらば
珍かるる快楽を介程を楠姑麻姫の隱形の術もて件の緯は趣き送るく見ゆ
写も今任とてとて金閣の斜前庭の樹蔭に立敷れは這日其暮ると等
程は御京師の九六媛の授けたる那返矢とらくとも不承下朱は漆と源尊
と寫りて去通觀と折らるるも屬るるを我師の示しありとてあま尊
氏が征算ある今不疑るるを然りとてその衣射返さるる事足ると要

とあれと尋思... 腰の刀を附れる。小刀子を抜合て... 件の前竹(刀尖を)...

あり。奇也。と。余念る。主従笑。厭面入り。浩処。姑麻。姫。庭の樹は陰。成。立...



五

虎為百獸王
 遇獅子無用
 さし矢さるる虎は獅子

有像第三十



五臓を破りて那身此の矢瘡をえさるる信候へ一と知るものも御所共猛可御不
例をえん薬のえ水よと罵る群立噪だて上と下と返る周章限るなり登時
姑麻姫も我身仙嬢の侍授あり今義満を射て仆と累代の怨復せ
ゆるわりの飲みだれも絶て那身傷着ね我所為る誰ぞ知る哉這更後
れてあはれ紫を遣ひ逢へ只今冤家の首級を捕て先帝并に父祖類族の諸
献て奈らる後悔厭首不達かかんとくと獨言て力を抜く縁頼も走陟らん
とせし程不忽地小眼眩る心神悩乱身も麻痺て二歩も運びなけれは
いと訝りて我を怪む可る心と鎮め刃を收めて舊の樹蔭に退て左も右も鬼
惟る不御留仙嬢誠めめて仇を遣て射く仆も五臓を破りて身傷つる速
きて還るべと教めり言の隙に本意を遂げめを言飽心地と教誨
情の漫の杖も頭顱を捕んとす故小眼眩み身も麻痺れ進退不便なり

然りと悟る足ることを知す神の憎と通て福も身も殺せんとあれ就て道徳
不可思議仙嬢の徳仰々嗚呼介也と思ひかたて弓を携へ飛行の樹の時程
む葛城山なる去通觀小から來り却九六媛も信々と報知する上前條の如し身の軟
ひを演小けの九六媛これぞち所と和女郎今宵宿所は退りて七日許経て又來あそ
時候まで京師の風声大々るる這地をさるる以合言とあるん來ぬ折出仙書
三弓を必よ携へる身又示を要あるを三更と知止端を姑麻姫と戦服と解卸きて
夕飯食とらるなかととふ兩個の仙童女あるる果て姑麻姫と俱に次の間山退
りて準備の款待丁寧あれ憶ふ時を程けり信而二更の比及ふ姑麻姫の仙嬢
別を告げ宿所は遠くて送し置る分身の法を惜み地を返り收めて然らば容を
たや三四日と過ぎ隨ふ京師の風声漸次小少く其頭の秘密を知りたる人の話
志を洩すふ北山殿より少前月より死病着たりき五月に至りて瘡のあり

是より。六日の黄昏時侯免道より合寄ぬる。許りの堂と金園の池に頭
 放きて法水院中亦肉せず憶おも夜氣に感々。御惱再發未のけん暴小華を以
 ける小取不思議あり折らぬ後方おぼゆる童扈從の赤松律師則祐の孫
 少く赤松五郎則助と喚做さ少年にける病病もあて上共侶もその坐と去らば茶死
 ある。緯の奇怪は是のまゝ誰かて来れば源尊氏と朱漆もて寫し征箭
 一條御座の頭ある何とらん歌さ箭竹に彫着てあける。當直の老輩二兩名を我
 逸快く平七のまゝ怪むのまゝ任る東西と披露せ世の風声の宜かた疑ひは傳ふ
 似ら焼棄る小儀まゝと。快合秘くられは是を知りてのまゝと然る方さるる
 守えら北山殿の御運愛を冠位へ人臣の上と極めて従一位准三宮に做升りぬ。一
 御他界の後幾日もあてとさう入又太上天皇も號を贈りぬ。教日の廢朝諒同
 異形を御茶式の嚴重なる本日ひもさすも御法號の鹿苑院殿天山道義公

と唱ふ。元年の五十一歳へ介のあれも室町殿持の太上天皇の惟下とを辞し直示さ
 めひと七枚も鹿苑院殿の元年三十八ける六月二日相國を辞しぬ。御落飾
 ませかも海内の政事と新將軍權不任ぬ。御男義嗣卿を鍾愛のあゆを
 関白の上座に居りて威勢を示さん。今茲の春三月四日當今後小松を北山に
 金園不行幸做す。幾日の花宴の御遊ありけり。萬吉皆かの如く。隨ふまゝか
 ども成者必衰の理り。常迅速の風の與り。露の玉に緒を。會駐めぬと克く。為惜
 かた死んぬ。返らぬ夜甚す。分りある。因て北山の金園の義嗣卿を讓人と逆仰せ
 あり。あれは義嗣卿に侍する。と北山へ出仕の大小名。異日の中も異なる。ね
 宛京師の西柱の將軍より。まゝ似て。せと佔ひぬ。勘くも。るれも。管領斯波殿權の
 當將軍を推尊く。嫡庶の差別を立ぬ。北山殿へ。参りぬ。終に。實分りぬ。と。北
 左まれ右もあれ。鹿苑院の薨去のよ。明朝へ仰遣されて。諡と諡のふ。の。約莫。是

士不わんぬの撰家清花の大臣より御内外様の大小名法師巫覡小至るまで愈後
 まつと上落して吊ひまゝにふる。是亦より當國の守護遊佐殿河内守藤原就盛由京師へ赴
 知情報より多辯ある浮世の噂も山寺へ疎く耳入りかゝりしと姑麻姫の
 又仙術を密々外に出ず其頭の噂を那這と竊言すう虚実を擇むるの言大抵
 美事約七日許経て又分身法を設けて獨去通觀不赴師の仙嬢を見奉り
 世の風鼓耳の趣も箇様々と報知しての身日奴家づ北山と義満と共に射て
 去る童屋従の赤松律師則祐が孫也赤松五郎則助と喚做すの所ら那則祐の
 當初大塔宮小仕まりて元弘二年夏六月十津河の御難の折宮の命を替まつん
 と稟せし事も似て父圓心と俱より氏に従ひて宮の足利直義を弑されぬ恨とせむ
 とく賊の股肱と做て一期榮て身故りしと則祐は應永四年十月に卒す最朽惜く思ひふ孫
 るも射て仕せらるる天罰でせんか。あは九六媛點頭て那則祐子の義則も

義則の兄子ヨネヲ嫡子の満祐次ハ祐之次ハ則敏繁次の義雅と名のるはれざる則
 助の二子も少知ぬもの凡獨射たれども千枝の中より一葉を奪ふ其天々のはらへ
 たり只彼も堪えたり那義満は太上天皇と贈られし二條のまゝはらへん獻慮
 よるはさるあはれとて武威不憚りある所以のまゝ大皇國へ入臣して皇位を犯すの
 ぬる事情を白徒へ告げ武家の面目を辱めたるも世にあらざれどもあれらふより
 ても義満の僭稱不臣の悪名を後子傳る外ありて正成義貞の如き忠義
 拔擢するも陣歿の後南朝を贈官贈位ありけるも子孫の面目を辱められ今
 足利の勢いにて望み何事欲遂さるるも其蔽政の致す所此も義貞の如き忠義
 その欲を極めれば必子孫に禍害ある幸いなり義持の辞一稟せし切りの
 罪滅してあはれとて明國の君に告て諡するも栄とありて亦義持の罪を免る
 古も親魏倭王之印ありて魏倭をて國史を古僭稱の逆臣の唐山へ倭媚す



大正三年三月二

十二

大正三年三月二



あはれあはれの花のかさめ
 見りあふせつるまうんや
 仙家豈無生別
 佛閣何悲死恋
 あくある山のたろこまれそ

依家仙傳三車卷二

三車卷二

疾時も分根亭へ退らざればとて活人草を親前へ薦められも定業をなす
 その效も既ふと知正尼の病着一句許不及る四月八日の朝姑麻呂姫の枕方より近
 着て豫你的祝髪と五月の遠忌と遂にせんといひし画餅も露命旦又の通り
 たる信れは且出家の折を待つてよりぬれ後住の徒弟の智圓と逆定められ今
 より智圓の後いで讀經と習ひぬか我身稚より時より脾胃小腹をて目も大く漸々
 瘦衰で命危るけと親達の歎に當院の本尊地藏井の深くも祈りぬる
 利益無縁で命根も命も留めぬとて地藏井の深くもせんとして女僧おせられて四十餘徳
 薄けれども住持お作りて如千名の徒弟さあ戒約を成し成就して弥陀の迎を受な
 るべしと送るも願の後世と上とて出家の功德と遂に最町寧に告げ
 大の日竟小大往生の素懐と遂に生死の人の一呼吸の如し逝のめられぬるあり
 然と佛生日下して愛を遷化をいひ羨むるえけりとしてその徒はみける余程の姑

麻呂姫の哀別の涙乾く隙も救ふ先見の當りく剃度と免れぬる死
 喪の悲を遣う方もる歎にせん。廿余毘安花甘の果て初て宿所退りけり。這年
 智圓尼後住お作りて寄宿の尼も甲乙と交代せも多りけり。是より寺風變易
 して憑し氣をくぢりけり。信而その次の年智正禪尼の一周忌果し比有一日現住
 智圓尼の隅屋小一郎維盈とその妻縫殿と方丈へ招ききて談をせ。信の何と
 かり言改る不似されも姑麻呂姫年来當院の地内お住ひの事先住の姨姪親
 こそありけり。比より然も外視お違ひる今も生情の漏るる時候
 る小容止特お美しけれ影護はるる且和殿夫婦之農僕もごご丙下と
 る仕るる後々も舎藏措て外聞をくぢり然と今速お追ひまんとお申
 せ和殿們先あのころをて左も右もあかとの事維盈一説不及し仰の趣宣お介
 る。姫上の生息とてお父を仕るると諾ひて縫殿も共侶お分根亭へ退り。却姑

まひめあつて、院主智圓尼のつれよき送るる報知まれば、姑麻姫の歎息を
 其所以あるとあり、現住の世方ありて、利の疎く、取性あるふ年来、我主従の地を塞ぐ、儲
 賃と出さる處を厭ふ。口状とて、守りある幸ひ、維盈が購求めたる莊園、あれは快く
 其頭宅と造りて、退くこと、早かるめ、是より外、思念あり、とて、維盈異議も、在下
 とて、御同意、年來の貯禄、あれは、右も仕んと、応て、次の日、智圓禪尼の方丈、對して
 よと報け、番匠と取合、寺より十町、あまの山脚、九の村、稍、盡、一、座の莊院、を、建
 る、小冬に至りて、土木、工、事、を、成、す、是、冬、の、十、月、の、姑、麻、姫、の、移、徙、を、住、持、の
 禪尼、同、宿、の、女、僧、達、も、人、情、匿、り、く、別、に、別、に、維、盈、夫、婦、の、へ、ら、く、人、奴、婢
 農僕と從て、八九の新宅、移りけり。嗚呼、鄙吝、多、く、智圓尼、の、言、を、設、て、今、より、後、ま、で
 分根亭の儲賃、を、多く、合、ま、く、欲、せ、し、その、緯、を、く、品、給、ひ、て、姑、麻、姫、主、僕、辭、し、
 去、り、け、れ、ら、ち、咳、く、の、も、腹、の、立、ち、も、人、は、報、を、る、る、に、只、喚、醉、し、と、の、を、ひ、け、り。

第二十四回

考墓小禱、楠女残仇と較手り
 謀、局、を、結、び、て、沙、弥、災、祥、と、訟、ふ
 却、説、楠、姑、麻、姫、の、八、九、の、莊、院、の、移、住、を、て、如、意、宝、珠、院、の、在、り、時、より、の、謹
 慎、と、言、ひ、て、苟、且、も、里、人、と、面、を、對、せ、を、遮、莫、一、莊、園、の、主、を、れ、名、號、を、り、あ、る
 へ、と、村、長、の、の、の、の、世、の、憚、り、を、楠、を、名、告、を、即、地、方、の、字、を、取、り、八、九、の、姑、麻、姫
 と、を、吸、せ、け、る、今、茲、の、家、作、移、徙、を、て、事、を、り、い、く、も、暮、て、明、れ、の、心、永、十、九、年、姑、麻
 姫、の、年、二、八、の、の、浮、世、の、女、子、の、春、の、日、を、銷、し、ら、く、花、を、去、ら、ね、鳥、は、愛、る、習、俗、を、り、あ、る
 姑、麻、姫、の、無、算、の、起、臥、毎、不、少、く、我、身、仙、嬢、の、別、を、ま、り、り、よ、り、と、五、稔、を、り、あ、る
 け、る、曩、の、師、恩、を、戴、り、て、正、可、の、怨、敵、義、滿、を、射、て、仆、た、り、れ、れ、も、劍、術、を、り、あ、る、那、身、を
 傷、ら、る、の、折、送、せ、返、矢、の、や、近、臣、某、甲、們、が、會、秘、せ、と、言、え、り、人、の、知、る、べ、し、據
 由、の、實、我、做、せ、り、今、や、思、の、夢、に、似、て、か、る、え、と、せ、證、据、を、り、疑、ひ、を、り、あ、る

はあわれなむ。性る北山の復讐。只是我師の仙術也。約おせ。我年来。然と慰
 めたまひ。飲是も亦知。ぐく。仙嬢別。折後と契。と叮寧。誠と貽。玉
 ひ。五稔以来。忘れ。苟且中。劍術と弄。び。る。こ。あ。る。北山の復讐。今
 心不。嗚。那義持。親。似。胸。窄。け。僻。事。多。他。親。の。讓。と。受。く。大
 將軍。たり。十八。九年。ある。身。れ。も。前。約。不。背。は。り。て。小。倉。宮。東。宮。は。喜。ぶ
 ら。る。沙汰。も。今。茲。義。持。計。の。稟。と。今。上。第一。の。皇子。実。仁。親。王。御。受。禪。あ
 一。と。風。聞。き。後。々。々。小。倉。の。太。天。皇。山。院。の。敵。慮。の。画。餅。も。あ。ら。ぬ。い。て
 我。京。師。を。赴。り。潛。分。て。那。義。持。を。首。級。と。捕。て。誓。約。不。背。と。復。さ。今。世。後。世。の。君。と
 親。を。盡。ま。忠。孝。兩。全。ふ。て。夢。致。と。も。多。い。身。年。の。北。山。數。は。類。あ。ら。ぬ。證。迹。其。里。小
 明。中。脱。れ。さ。る。坐。と。去。ら。る。刀。伏。と。名。送。さ。る。這。山。里。世。不。樂。て。老。死。さ。る。木。杏。小
 優。也。思。言。さ。る。仙。嬢。の。教。誨。不。悖。る。罪。深。け。れ。も。多。く。母。不。喜。愛。に。世。の。り。ま。る。存

命。允。さ。せ。め。の。と。念。ら。尋。思。の。胎。と。固。め。と。氣。色。も。見。い。さ。る。三。月。向。盡。と。一。時
 候。有。一。日。縫。殿。と。維。盈。と。側。不。招。れ。却。い。さ。我。身。総。角。る。比。より。亡。父。母。の。身。高
 野。山。詣。と。思。起。た。り。れ。獨。り。路。を。ね。び。も。黙。止。せ。不。打。も。續。て。兩。夕
 る。心。か。る。夢。を。さ。れ。り。今。茲。那。兒。山。詣。て。宿。願。も。果。え。と。欲。さ。る。頻。り。不
 る。ぬ。と。て。這。美。と。告。る。其。頭。の。准。備。と。せ。り。と。寔。さ。誘。れ。縫。殿。の。ち。維。盈。も
 沈。吟。ら。面。と。照。火。と。御。所。望。餘。義。を。い。も。又。折。の。い。最。妙。嫩。に。身。中。旅
 宿。不。測。の。殃。危。あ。ら。後。悔。其。里。不。達。さ。り。稍。年。来。も。あ。ら。不。堪。君。と。い。き。欲。り。て
 悄。々。地。不。擇。と。い。も。宜。死。所。因。と。い。も。就。も。御。旅。の。世。の。ゆ。え。あ。ら。ぬ。と。い
 止。め。り。と。苦。り。と。只。顧。諫。と。縫。殿。の。倚。痛。を。有。け。れ。と。詞。を。添。て。只。云。云。と。慰
 め。け。り。憐。て。已。死。の。ま。ね。姑。摩。姫。の。次。日。又。件。の。姝。母。夫。婦。不。起。行。の。と。い。て。昨日
 大。く。諫。め。られ。て。我。意。を。推。さ。る。女子。の。封。疆。と。い。て。教。の。誰。の。知。り。ま。る。世。

捨れて遠國他郷の伶仃なるもの多かるべし。亡親の死與ふ火山火地不詰るもの途由て
 禍害わん然とていさむ已ん不孝の故に思ひ決り物詰とて伴子立れ去り其身は
 つゞ首途とせん何の苦か死と頻り小杖ひ意の駒を馬とるんより更維盈貌を
 更めて然るも思召るべし今ゆふ又何を哀れん在下死伴は下。縫殿も従ひまらへ
 却不自由あるべしれども這が存るべし留守とて委るものいふ然るも思召るべし
 俱に倒路次の煩ひるん絆の不便にこれとて分苗時の近着の農僕們に
 轎子と昇せしも做かざる。あつたは仕んと姑麻姫とて不婢兒伴あり
 てもよ。潜詰のゆわれ轎子の好かば是は就てもよとて汝達の獨子なる復市に
 うせり。我身の生れり。比親知ざる約束も大和の人の取せしあつた。家頼の兒
 といひ。我身の與ふ乳兄弟并が今ま在るべし萬支幫助するを時不祥の
 るれも生別を悲しけれ。後音耗とて。と回れて縫殿の屢瞬く目涙坐吐して識

られま。復市が。今痛氣を思召する。死情を有なけれ。千劍破赤坂の城
 没落の後姫上誕生す。比賤妾と姪母あるされ。見子あり。後ま。馬鞆あり。と
 小一郎が心い。計ひ。大和の宇ヨの郡。石倉蜂六との農戸の生涯。不通の約束。と
 開が養嗣。遣。那。伊勢の園司。北畠殿の封邑。此の由縁のあり。れ。て
 妻のわれも生育。と。つ。媒妁。と。遣。復市。年。稍。五。歳の。春。を。死。恐。れ
 る。姫。上。の。二。歳の。兄。で。侍。り。今。茲。既。十八。歳の。弱。冠。小。を。り。ら。あ。る。件。の
 蜂六も農戸。れ。も。武。藝。と。嗜。て。射。る。技。と。善。ま。と。伊。勢。へ。徴。され。て。三。氣。城。に。輕。卒。の
 ち。と。風。便。の。つ。音。耗。と。て。侍。り。と。い。ふ。維。盈。推。禁。め。て。噫。蓋。も。る。死。過。去
 襟。譚。忠。義。の。與。の。恩。愛。と。断。ね。が。岐。道。の。不。覚。あり。鄙。語。の。不。殤。せ。し。子。の。年。と。算。り。ふ
 異。る。と。言。取。鳥。許。と。叱。り。と。姑。麻。姫。實。解。め。且。慰。め。て。つ。小。就。て。も。汝。達。夫。婦。の。中。心
 義。胆。感。深。る。復。市。の。り。も。絶。て。音。耗。と。す。も。命。あ。る。時。あり。環。會。見。多。る。に

方小跪居し維盈事情と知れども憂ふ漏收袖の露うち拂へる結陰の迎梅雨
 るやと天を眺む惘然と主を跟て又故の歌店を投て急ぎける是より又姑摩
 姫の京師の昔跡各所を規てて還る去めども四五日逗留せし程の昏の行轡
 内小坐して山水を眺め地理を考へ夜又悄悄地子臥房を出て室町將軍の廿化管
 潜入ると三回ふして義持公の寢所まで案内を知らせられ方才迷憾るるべし
 と思決り又の夜の次の間臥る。維盈們が睡息を覗ひ先活人草を一莖腹
 きて刀劍の御宗を固く且仙術をもて準備と秘し措る身甲と合し身を固
 めて先祖相傳の短刀の菊水と名づける長九寸五分を抜放ちて菅元公と名
 韃小收め腰小穿て咒文を唱へて外面歩と軀て一息間小室町柳營の赴て潜入
 する義持公の寢所へ近着程の夜の丑三刻をふける話分両頭は這山洛外
 紫野の大徳寺小名の宗純法彌と二休と喚ゆる一個の沙弥ありけり此は後小

松帝の御落胤ありければその母卑しかりければ民間小降りて談生を刺母親を
 産後幾程も身故りけり。この故に親族相計てその手を法師にまかせられ五
 六歳より比より大徳寺へまかせり。多分小這二休の菩提達磨の再説あり
 けり睿悟聰達凡そねば經典とて讀むる。他宗といへも渉るる。既に
 大徳寺の宗曇井化更和尚を師と學び。出藍の器をえり。この故に教化別
 傳の止觀の密の松風維月を友とて。魔佛本来空の眼を用ひ不立文字の坐
 禪の床の意馬心猿を鞭り。有漏を功徳の塵と拂ふ一柄の拂子二枝の如意
 至る。と云ふ所を月を指て指と忘れ花を拈て微く笑む。蒲團上の工夫一草の西
 來意情景面を棄却して八宗九旨と看破し。然るに這沙弥年少氣も
 上の公武士族より下の村翁野娘まで尊信せむとのある。是より室町殿和
 對中折る二休と屈招く。その法談と聽聞し或は局對其基と闘て成敗理乱は

道理と問ふ。却説永壬辰夏四月中旬室町殿より毎の如く一休と招請あり。法
 談の後田某ありけり。縛果て一休の局と退いて直度なり。先より上と相一する。今宵
 必死の厄ありん。御小心あれか。とらふ義持敬馬にゆいて。その安らふなり。病難を授
 仔細いふ。と問れて一休然し。御病厄より。御凶相あるを。今日の日。田某君が石の
 威殺氣見れり。且三番田をみて。三番を。輪のひる石の不足の四目二度末局の首
 の。四は是陰の數るれ。死門よりして死門の。四と合されば。數八は是。是よりして推せ。と
 劍難る。と疑ひ。幸ひる。末局の。三目。湯の。扇を。輪。と。い。ご。も。死。門。よ。り。生。門。に。倚。り。
 象あり。願ふ。今宵。丑。子。勁。敵。あり。て。御。寢。所。と。張。り。の。ゆ。い。ん。最。も。危。く。い。と。未。然。成。
 示を智識の明断疑ふ。も。あ。れ。い。義。持。要。時。沈。吟。し。と。そ。ら。り。あ。り。て。免。れ。や。再。問。
 れて。さ。い。今。宵。の。悄。々。地。の。御。寢。所。を。易。ゆ。ゆ。不。優。と。る。恐。れ。る。と。拙。者。の。常。の。御。寢。
 所。小。坐。禪。と。仇。尙。來。と。對。治。せん。這。美。勿。論。隱。密。中。と。究。竟。の。緝。捕。二。十。名。を。屏。

風の左右伏措にて搦捕しあり。と。義持點頭て。且感悦斜る。近臣の。侍々
 と機密を。一。部。と。定。め。て。黃。昏。時。候。より。准。備。と。整。一。休。と。留。置。て。別。席。之。御。食。
 応ありけり。憊而。中。の。比。及。より。一。休。の。室。町。殿。の。常。に。寢。所。に。坐。禪。し。て。仇。の。事。と。多。程。の。
 武藝。力。量。覚。あり。る。勇。士。二。十。名。二。隊。に。分。れて。屏。風。の。左。右。に。埋。伏。し。眼。不。遮。る。の。あ。ら。む。
 捕せんと。夜。と。俱。小。暗。號。と。定。め。て。扣。え。り。案。下。某。生。再。説。姑。摩。姫。の。敵。中。を。恣。
 る。備。の。あ。ら。む。と。思。ひ。も。か。げ。室。町。家。は。奥。深。く。潜。入。り。案。内。知。ら。義。持。の。寢。所。の。紙。
 門。踢。開。け。て。找。入。ら。ん。と。せ。一。程。小。年。尚。少。一。個。の。法。師。が。蒲。團。の。上。に。跏。趺。坐。と。在。り。是。を。
 心。を。訝。り。さ。る。と。問。は。れ。と。踏。入。り。折。り。件。の。法。師。の。眉。間。より。白。光。颯。と。目。光。を。射。し。
 姑。摩。姫。憶。念。も。眼。を。射。ら。れ。て。瞑。眩。死。兩。三。歩。兵。兵。と。伶。行。と。倉。親。濟。し。と。一。度。不。起。
 る。居。よ。の。力。士。們。屏。風。の。左。右。に。見。れて。二。と。争。ふ。惴。雄。の。壯。伎。二。名。左。右。より。組。か。せ。組。
 せ。身。を。反。し。と。項。髮。廻。で。二。三。回。舁。手。と。拍。と。投。退。る。透。も。あ。ら。む。二。三。の。力。を。寄。



六ノ巻 一ノ章 一ノ節

廿一

三ノ巻 三ノ章 三ノ節

三ノ巻 三ノ章 三ノ節



おきやうのくひ
違教之悔
女俠苦戦
るんはひな
ひくとせ残
るの雨ゆち
るこもろく
やゆゆ

三ノ巻 三ノ章 三ノ節

三ノ巻 三ノ章 三ノ節

身いちらせ。短刀抜く間もあつた。力士の力も懲る。競草の。姑麻姫の物もせ。左不柱え右不當りて。些も組せ。投伏々々。呪文を唱へ。形を隠して。逃去んせ。程一休
 身を起して。杖束ぬ。姑麻姫の。喉が。詰と。つて。物々。短刀を。見ると。抜くも。えせ。直額。位で。丁と。敷。刃の。光共。侶。一休。身。斜。数珠
 揮抗て。姑麻姫の。眉間。と。碓。と。打。姑麻姫。憶。を。捐。殿。居。小。控。と。伏。ま
 処。獲。つ。と。罵。幾。名。の。力士。門。扉。一。推。累。も。押。へ。索。を。被。小。け。登。時。宿
 直の。頭。人。を。け。熊。谷。近。江。介。満。實。宮。下。野。満。重。門。二。之。隊。力。志。徒。へ。寢。所。の
 前後。と。守。護。と。在。り。既。一。七。癖。者。九。擲。捕。れ。て。出。て。先。一。休。道。徳。賞
 賛。一。更。不。姑。麻。姫。さ。ち。向。ひ。て。賊。婦。何。等。の。所。欲。あ。り。て。一。休。御。寢。所。を。犯。一。休。和
 尚。の。法。験。さ。く。由。り。大。事。事。及。ぶ。大。胆。無。敵。言。語。同。断。意。亦。必。支。黨。あ。ん。姓

名。と。告。り。同。惡。と。名。を。招。了。せ。か。と。の。せ。も。果。ぞ。姑。麻。姫。の。冷。笑。以。疾。視。て。手。首。の
 小人。何。ぞ。の。我。の。南。朝。股。肱。の。忠。臣。楠。正。成。孫。之。河。内。守。正。元。が。嫡。女。也。八九の
 姑。麻。姫。と。喚。ぶ。の。足。利。は。是。君。父。の。怨。敵。義。満。義。持。誓。約。の。背。に。て。南。帝。を
 給。た。ま。り。罪。惡。既。極。ま。り。と。父。祖。の。遺。忠。を。嗣。人。與。み。今。宵。必。義。持。の。首
 級。と。捕。ん。と。ま。り。支。成。ら。ざる。天。命。の。也。は。義。持。の。對。面。と。具。し。ん。若
 們。が。知。る。と。支。成。ら。ざる。敦。圍。猛。く。罵。り。滿。實。滿。重。怒。り。堪。が。暗。に。賊。婦。が。廣。言
 骨。と。折。り。て。支。黨。と。招。了。と。ま。り。と。焦。燥。つ。て。一。休。乘。時。と。推。林。木。姑。麻。姫。の。對
 いて。烈。女。さ。と。の。迷。恨。さ。り。怒。り。鎮。め。て。所。の。和。女。郎。の。勁。勇。あ。る。あ。れ。も。行。新。正
 か。ぞ。実。不。恨。と。雪。ん。と。い。つ。戦。場。は。相。益。で。旗。と。進。め。鼓。と。鳴。り。一。休。果。と。て。大。功。も
 り。め。然。る。と。何。を。垣。と。踏。穴。隙。と。鑽。り。刺。客。夜。姿。の。状。態。と。事。と。て。假。令。怨。復。せ
 と。も。そ。の。良。將。の。せ。ざる。所。勇。士。の。恥。と。す。所。あ。ら。ず。と。我。小。和。尚。一。休。宗。純。の。機。と。奪。と

將軍家代りまゐる世和女郎と這果善なる勇婦を辱し與ふは天道淫福
 和女郎が行ふ所不正の罪ありみづる作す薛子あはれども人を救ふ出家の本
 意因て今宵の將軍の大阨を救ひまを明日又和女郎の必死を救ふとまの先
 意とこの意をいれればか。論其姑麻呂姫驚るるら。仰見つ頭を俯て羞て心せ
 ざれば。徳而宮熊谷の両頭人の且姑麻呂姫と一室内の最も緊しく閉籠て居る
 士まら成を却一休と共侶より君公に注進を介程小義持公の癖者ありと云え
 近習と云く後てまら眉尖刀を杖に奥より便所の一室を登昇掛りて在
 一室を注進の趣と云く所。縛の勢ひ斜る一休と旁に徳と謝して。天の明は我身
 むら。那賊女子姑麻呂と云んぐ。と云く。願ふに和僧を折る。當廳に淹
 留と云く。當門の助言あり。と又他事あり。仰見れば一休の仔細と云く。心て次の間退
 けの任。一程の姑麻呂姫の屠所の羊。異なるぬ一室ありても物も思ふ。快隠形に

術にて脱去りる段と見ゆ。又義持と敷果さんむと尋思とて。數回件の兎文を
 唱ふ此も驗する。一。か。あ。あ。と。誂。と。は。と。思。惟。の。仙。嬢。の。寧。の。成。を
 送。一。仙。書。と。燔。て。再。術。を。弄。び。禍。害。あ。ん。と。宣。ひ。を。理。り。る。と。思。ふ。と。我。北。山
 復。讎。言。の。化。現。中。て。人。の。知。れ。れ。を。我。と。疑。ふ。と。思。ふ。と。義。持。も。亦。親。み。と。く。南。北
 御。合。體。の。誓。言。約。を。背。て。今。茲。當。今。の。御。受。禪。も。又。義。持。が。計。ひ。宣。示。し。て。小。倉。宮
 退。け。たり。當。今。の。一。の。皇。子。と。白。玉。位。が。即。け。ま。る。と。世。の。風。殺。身。と。云。ふ。ま。る。最。朽
 を。く。堪。ら。れ。ぬ。恩。師。の。教。誨。不。悖。り。ぬ。罪。を。と。知。り。ま。る。と。又。劍。術。と。行。ひ。て。敷
 ち。欲。せ。一。仇。の。與。ふ。竟。は。這。身。を。囚。れ。て。佛。の。縛。の。辰。す。あ。く。ら。い。み。づ。う。作。す。其。時。ぞ
 師。の。誠。を。悖。り。一。所。以。之。然。り。と。あ。れ。今。隱。形。の。術。と。行。ひ。て。後。我。術。破。れ。を
 と。那。一。休。と。名。ん。ふ。小。法。師。の。談。論。と。思。ふ。救。心。の。形。を。隱。し。脱。去。り。て。命。を。惜。む。似。て
 深。く。も。什。麼。一。休。の。打。れ。故。我。術。破。れ。破。れ。又。仙。嬢。の。逆。今。宵。の。命。を。敷。て

術と破りたる。然れりあはれ然れりあはれ仙嬢別れは位を折那四言四句と極げ遇
 一必敗とあり即今宵の敗績一則一休之下の三句何のぞん思ひ合まるよう
 仙嬢の送教その言錯る自業自得とあり君父の與ふ心と事平てその成
 らせ死て已ん豫覚期のうまれ歎ふ足らぬる。然れり知らぬ維盈縫殿們が
 年來忠る養育の甲斐もひをを送る。有敷糸は是も不便入就中維盈の旅宿の
 伴も立らぬ。主の先途はあはれ悔もせん恨もせん。疑ふまじりぬとも
 疑ひ過然師は受。恩と仇も身の終焉允さるると念ふ。死もあはれ外なるかりけり。
 却説その詰朝室町殿の姑麻姫と誅伐のふ就て詮議ある。義持あはれ姑麻姫の
 怨訴の趣と所とて已牌の王主と共ふ文廳に出る。前管領斯波義將入道管領
 斯波義教斯波義淳島山満家細川満元并西職七頭の評定衆は這宅も有司
 數十名列を正左右分れて齊々整々と侍坐たり。既時分る。空室町將軍

義持公の當廳の正面は此の幔幕と高く額を金屏と背あり。上壇お着のへど。
 熊谷満実宮満重稟接と奉り。先より相分れて縁頼の左右は在り。速く下知を傳
 へて徳々と叫れ力士三名姑麻姫と重繩被々牽出。来て大床近く推居ら。登時管
 領島山満家へ列をたてられて找せ出。姑麻姫より向ひて夜敷き。意趣を鞠へ。姑麻
 姫怯る氣色もる。言朽り。鞠問る。忠孝の國家の樞要我身女流はあはれとも父
 祖の忠義を承嗣て室町殿と敷手果え。とひ。外は他事ある。とひ。満家ら。笑ひて
 量義ふ南北相分れて戦ひ。問る。折る。が。然る。怨のありもせぬ。今南北却合體まりて
 足利家の徳澤と戴もとのめり。和女も亦是室町殿の民をの民とと上と犯せ。是
 則國賊之必同惡の逆徒あはれ。余餘黨と招了。来て呵責の咎と免れよ。とのせの敢
 志姑麻姫の一声。吻々と冷笑ひて。疎幽之管領量義ふ太上天白山。後龜。の世と憐愍の聲
 慮深く。當時足利義満が請稟。甘義を勅許。して。數个條の契約。束と定められ

即便三種の神器を當今に渡して御受禪の受と行はしめ義満も義持も虎狼の
 心と改め初の抗言は背逆なるも今までも小倉宮を東宮に立せしむる故は南朝に
 忠臣義士の齒を切りて義満義持が談妄權詐を恨み怒りける。信長は南北の御和
 順も今その甲斐あるに似たりと誰より足利一統の天下と見たりや我身生れてやうなく東
 西を知る比より父の戦歿君の御不幸少くも就て怨骨髓を徹りて堪えられず京
 臥し干し枕の習記を神符前とて義満を射て仕せしか人も人知されず義持
 もも敷も果して死んと思ひ決めず成らぬらん天命と素より同志の士卒に心ひら身
 ひとつで大事を以て起さるる鐵門重辟たるにかんて這柳宮を潛寄りて獨力を事とし是
 より外は公を以て快々頭を刎ぬ世に在る程の事隙を鳥惡無慙の大逆賊終に
 必知せんを飽きて罵る義烈の怨言側せし有司の胆を冷し舌を巻きて送る面を
 照すたり義持主の姑麻姫の權威を屈せぬ敵の過言を治堪も義將を召近き有て

空を賊婦が尾陋の悪言許さるるの事快牽せしと創し斬切とて後で徳世満家が
 拷問の最多寛一と怒る義將義の諫を御説宣ふ然るに死活を知る兇
 賊ともつて一個の婦女子は他が昨夜更蘭て御所へ替入るるに竹麻天より降りて又地
 上へ涌出り進退共々奇怪に知る言語應對絶て女子の氣質を必ず是地狗天狗
 否かの那身を準て狂の考欽是亦知るべし任官鳥許の癖者二日死に奴を不仕せし
 是再度の詮議の及ぶに夫處は死刑の處にあり世評いかり只寛一の御沙汰を
 まほられと直に小義持絶ふ點頭て然るに死をのぞき甚だ甚だと膝を
 向けて義將の雲時頭を傾けて最愚按出いへも大徳寺の二休の年少れを博識宏
 才の道徳の世以知れり幸ひ昨夕留められて今も御所より那二休の云と御商量
 ばすまはれん為るる事ありと直に立上る一老臣の當座に意見の義持
 等々怒解けて然る賊婦を獄舎に敷糸は再度の詮議に依りて衆皆の意思と



